

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児 ⑱

浅田 朋子

2020年の9月からローマで新一年生として小学校に通い始めた双子。

コロナウイルス感染拡大防止のための制限措置は、2021年に入り緩和されてはいるものの、まだイタリア全土で継続されている。

一日中マスクをつけ、課外授業なし、校庭での休憩時間でも友達とは距離を保ち、給食も黙食するなど、小学生の子供達にとって、友達と普通にコミュニケーションも取れず、のびのびと外で体を動かすことすらままならない不自由な学校生活が続いていた。その上、学校で感染者が出て自宅隔離になりオンライン授業に切り替わり、まともに学校に通えていない状況であった。

生徒がコロナウイルスに感染するとすぐさま学級閉鎖、クラス全員2週間の自宅隔離という措置の厳しさに、自分の子供が感染したことによってクラス全体に影響を与えてしまうことが親にとって大きなストレスとなった。もちろん子供が感染しないように注意しているが、親も働きに出ているし、多くの人と接触してしまうのはどうしても避けられない。

感染を恐れ、皆が疲れ切っていたところに、高齢者、医療従事者、そして教育従事者のコロナウイルスワクチンの接種が順次始まった。双子の担任たちもすぐに接種をし、自分が生徒に感染させる恐れに憔悴していた先生たちのピリピリとしていた雰囲気少し和らいだ。もちろん、感染しな

い、感染させないわけではないが、先生たちも感染する確率を少しでも減らすためにできることがあるならしたい、という思いであったのだろう。

そして一般にも年齢枠が設けられ、集団接種が始まった。申し込みはオンラインからである。

イタリアのデジタル化はコロナウイルス流行前から始まっていたが、あまりうまく機能していなかった。「なんか最近そういう流れになってきているから・とりあえずこっちでデジタル化しといたし、みんな頼んだで！」みたいな政府や地方自治体の丸投げ姿勢がありありと出ているような代物であった。特に問題なのが、オンラインで処理しても実際に対応する現場・窓口がついていけていないことであった。

ところが、このコロナウイルス感染拡大後、特にワクチン接種に向けたデジタル化に、イタリアは本気を出してきたのである。

このオンライン申し込みは本当によくできていた。ページのデザインもわかりやすく、最初に自分の年齢枠をクリック。その後、健康保険証番号、居住地域を入れると、付近の接種会場がズラッと一覧で出てくる。各会場の詳細欄にはワクチンの種類、1回、2回目の接種の日時まで全て書かれている。それを見て接種希望者は自分で会場、日時を選択することができる。選択を確定すると、携帯電話、メールアドレスを入れ予約完了である。その後、自分の携帯番号に予約確定のSMSがき

てメールの方に接種時に持っていく書類が添付されてくる。

学校の親たち世代の年齢枠が予約可能になってきた5月頃から「ワクチン予約した？」とみな挨拶のように聞くようになっていた。まだ承認されて日の浅いワクチンであることから不安に思う人、全く気にせず接種する日が待ちきれない人が半々といった印象だった。しかし不安に思う親たちも「接種しない子供世代を守りたい。早くコロナ前の生活に戻したい」という思いが強く、私の周りでは、ほぼ皆ワクチンを予約していた。イタリアでもテレビやインターネット、人々のあいだで、ワクチンについて様々な情報が錯綜していた。しかし政府はワクチン接種でさらに規制を緩和していく方向に完全に舵を切っていたので集団接種はどんどん進んでいった。

私も予約したものの、接種までの1週間は不安でしかなかった。誰かとこの不安を共有したくて、ワクチンの2回接種を終えている義父に「打つ前、怖くなかったん？新しいワクチンでこの先副反応が出るかもしれないのに…」と聞くと、「兵役の時に打ったワクチンに比べたら、なんともない」と言う。

イタリアでは2004年まで徴兵制度があり、義父も18歳になると徴兵された。その際、義父の所属したローマの軍事施設では、皆上半身裸で並ばされ「万能ワクチン」なるものを打たれたというのだ。これは人間用なのか？と思うほどの太い注射を胸にドスッと刺され、何人かは気を失って倒れた。ガタイのいい青年が泡を吹いて気絶した時はさすがに皆震え上がったそうだ。しかしその後、兵役中の劣悪な環境の中でも疫病は蔓延せず、みんな健康に過ごしたというのだ。「…それは、万能って、中身は何なん？」「どんなウイルスにも対抗できると言われたな」「そんな夢みたいなワクチン、ある訳ないやん、怪しすぎるわ！！」と私が言うと「ま、人体実験やな」と義父は笑った。

接種当日、全く不安を拭えないまま義父の運転する車で、ローマ市のエウル地区にある接種会場のローマ市コンベンションセンターへ向かった。著名イタリア人建築家がデザインした新しく近代的な建物で、ガラス張りの外観から見える内部構造がまるで雲のように浮かんで見えることから

「La nuvola(雲)」と呼ばれている。近代建築より個人的には古い建造物の方が好きなのだが、今回はこの近代的で新しい建物に、新しく作られたコロナワクチンを勝手に重ねて、会場としては一番合っているのではないかと気分を盛り上げた。



【接種会場の外観】

建物入り口で検温され、建物内の受付に行くように案内された。建物内は整然としており、スムーズな導線、掲示板もデジタルで、案内標識などもナイスデザイン。スタッフもキビキビとしており、普段は仕事中に私語の絶えないおしゃべりなイタリア人が黙々と、そして愛想よく働いていた。全てがきちんと機能していることに「なんやここ…イタリアか？」と本気で夢ではないかと思った。ワクチン申し込みのデジタル化といい、やればできるのである。

受付が終わると番号が渡され、いよいよ会場内へ。会場は巨大なワンフロアを「sala d'attesa(待合室)」「sala visita(問診室)」「sala vaccinazione(接種室)」「sala osservazione(経過観察室)」と4つの部屋にパーテーションで仕切っている。

待合室で少し待つと私の番号が出たので「sala visita(問診室)」に進んだ。そこでは医師による問診が行われる。椅子と机が30ほど並び、それぞれ医師が座っている。案内係に「手をあげている先生のところで問診してもらってください」と言われ会場をみると、御年80くらいの女医が私を手招きしている。周りをみたがそんな高齢の医師は

いない。今まで新しいものづくめできていたところ、突然の老医師の出現に(しかも私だけ)少し不安になりながら席についた。

名前と年齢を確認され、問診が始まった。確かに高齢だが目は鋭く、またエレガントで落ち着いた雰囲気のある先生である。先生は問診票にある項目ごとに質問し、その項目に震える手でひよろひよろした線のチェックを入れていく。大丈夫かな、先生…。問診が進むと、私はいよいよ接種する最終段階になったのかと、すごく緊張してしまった。すると先生は問診を中断してペンを置き、私の目をじっと見て「不安ですか？」と聞いてきた。こんな歳になっても注射を怖がるなんて恥ずかしいなと思いながらも「はい、やはり怖いです。新しいワクチンなので」と正直に答えた。先生は、うんうんと頷くと「あのね、今やめて家に帰っても、もちろんいいのよ」と優しく言った。「ワクチンは感染拡大防止にとっても重要です。でも一番大切なのは、この困難に負けずに皆が団結し、前に進んでいくことなのよ」。私は少し気を落ちつかせてから、「子供たちのためにもワクチンは打ちます。そして日本の両親にも会いに帰りたいです。そのために、やれることはしたいと思っています」と答えた。先生はまた大きく頷き、「みんなでこの困難を乗り越えていきましょう。あなたは日本にも帰れるし、みんなが日常を取り戻すことができるわ」と力強く言った。お礼をいうと先生はにっこりと笑って「Il futuro sarà bello! (未来は美しいわ!)」と言って私の肩をポンポンと叩いた。

たくさんの経験を積み重ねてきた高齢の先生ですら経験したことのないようなウイルスの世界的大流行の中であっても、怯むことなく率先して医療の現場に立ち、若い者を勇気付ける先生に心から敬服した。

最初の感染爆発で多大な死者を出したことは、イタリア人に大きなショックと悲しみを与えた。その後、ワクチン接種が進み感染者は減って来たものの経済悪化が深刻化して、まだまだこの先の見通しは暗い。刻一刻と状況が変わる日々はどんどん過ぎていき、遠く思える未来もあつという間にやって来るだろう。

接種会場から外に出ると義父が笑顔で手をふって私に駆け寄って来た。「どうだ、万能ワクチン

よりマシだっただろう?」「うん、大丈夫みたいやね」と二人で笑った。そして私の顔を覗き込み「Non ti preoccupare. Andrà tutto bene. (心配ないよ。全てうまくいくさ)」と言った。義父の「Non ti preoccupare」を言うときの優しさや力強さ。私も双子の娘たちにこんな風に声をかけられるようになるだろうか。

大きく息を吸って空を見上げ、先生の言葉のように「Il futuro sarà bello」と願い、希望を持って毎日を送っていこうと思った。



【会場内 sala osservazione】

(元当館語学受講生)

<秋の無料体験レッスン>

10月からの秋学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。お申込みお待ちしております。

●イタリア語

京都本校： 9月30日(木)11:00
10月2日(土)11:00

四条烏丸： 10月4日(月)19:00

大阪梅田校： 9月29日(水)11:00
9月29日(水)19:00

●スペイン語

京都本校： 9月28日(火)16:00

カルヴィーノとアーティチョーク 38

*もうひとりのイタロ、ズヴェーヴォの

『ゼーノの意識』について、再び*

堤 康徳

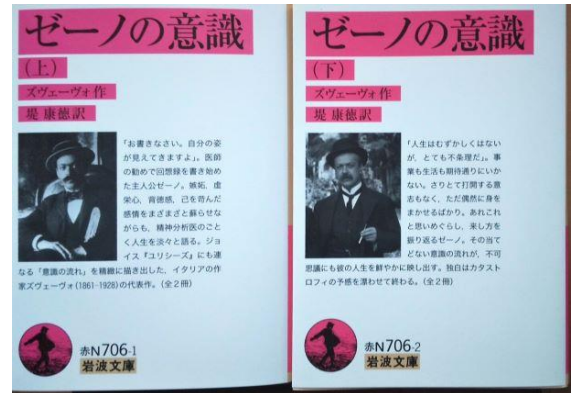
ちょうど5年前にも、私は本欄で、イタロ・ズヴェーヴォの小説『ゼーノの意識』(Italo Svevo, *La coscienza di Zenò*) について書いている(2016年10月号)。その年の夏に、ズヴェーヴォの故郷トリエステに1週間ほど滞在し、作家の足跡を訪ねたばかりだった。今回また同じ作品をとりあげるのは、今年初めにようやく、拙訳『ゼーノの意識』上下巻(岩波文庫)を上梓できたからである。訳し始めてから出版まで、およそ8年という歳月を要してしまった。思えば、長く険しい道のりだった。そもそも原著自体が長く、解読も容易ではなかった。毎日こつこつとノルマを決めて訳すのが理想だが、ほかの仕事や優先したり、たんに怠けたりして、作業を中断していた時期もたびたびあった。

ズヴェーヴォの代表作『ゼーノの意識』は、くしくもというべきか、カルヴィーノの生まれた1923年に刊行されている。ただし、名前以外、両者に特定の文学的な共通点は認められない。カルヴィーノがズヴェーヴォに言及した文章はけっこうはない。

イタロ・カルヴィーノは本名だが、イタロ・ズヴェーヴォのほうは筆名である。本名はエツトレ・シュミツ(Ettore Schmitz, 1861-1928)。両親の一族はともにユダヤ系だった。ズヴェーヴォは、第一次世界大戦が終わるまでオーストリア領だったトリエステで生まれ育ち、この港町を舞台に三作の長篇小説を書いた。その三作目が『ゼーノの意識』である。

「イタリアの(italo)」と「シュヴァーベンの(svevo)」を意味する形容詞が組み合わされたペンネームは、娘のレティツィアの証言によれば、作家がドイツ文化とイタリア文化の双方に負うことを示すものだという。

1919年春から1922年夏にかけて執筆された『ゼーノの意識』は、1923年ボローニャの出版社カペツリから1500部自費出版された。



精神科医に勧められて書いた患者の手記という形式をとるこの小説には、ふたつの語りの時間(主人公ゼーノ・コジーニがペンをもって書いている現在)が設定されている。ひとつは、57歳のゼーノが、S医師の勧めで手記を書いている1914年。本書の第3章から第7章に相当する手記で語られるのはおもに、何度も試みては失敗する主人公の禁煙、1890年のゼーノの父親の死から、主人公の結婚と不倫、義兄グイードの死にいたる数年間のできごとである。第二の語りの時間は、精神分析治療中断後の1915年5月3日から1916年3月24日まで。日記形式で書かれた本書第8章に相当する部分である。

主人公ゼーノとともに、本作で強い印象を残すのは、ゼーノの義兄にあたるグイードだろう。「ある商事会社の物語」と題された第7章では、グイードの経営者としての無能力さと泥縄式の対応、妻アーダの病とグイードの死が中心に語られる。商売におよそ不向きな性格など、ゼーノとグイードには共通点もあるが、グイードはゼーノよりもヴァイオリンを巧みに演奏し、女性にもてる。ゼーノが思いを寄せるアーダが伴侶に選んだのはグイードだった。一方ゼーノは、アーダの妹アウグスタと、なりゆき上というか、ほとんど行き当たりばったりで結婚することになる。だがそのふたりは、おおむね平穏な結婚生活を営むことになる。一方、グイードと結婚したアーダには幸運がほほえまない。さまざまな試練が待ち受けている。病のせいと美貌を失い、夫の浮気に悩まされ、その

死後は幼い双子を連れて義父の住むアルゼンチンに移住するのだった。

グイードは、本業にはまるで身が入らず、むしろ釣りや狩りなどの趣味に忙しい。損失をごまかすために、帳簿に手を加えようとするなど、経営者としての最低限のコンプライアンスすら欠いている。私生活では、妻子がいながら、自らの事務所働くカルメンを愛人とし、ずるずると関係が続けている。そして進退窮まった彼は、ついに大量の睡眠薬を飲み、死にいたるのである。

ふた組のカップルにふりかかる運命の皮肉を、ズヴェーヴォはユーモアを交え淡々と描き出す。運命の皮肉といえば、グイードの商取引と株の売買にかんしても興味深い箇所がある。イギリスに発注した60トンもの硫酸銅(solfato di rame)が値を下げ続け、売ろうにも売れなくなり、それをまるごと倉庫に保管せねばなくなる。安値で買った商品を高値で売る目論見がみごとはずれてしまったのだ。10トン・トラック6台分と考えると、そうとうなスペースが倉庫に必要だったことだろう。水に溶けて鮮やかな青色になる硫酸銅は、私たちにとって、理科の実験材料としてなじみがあるが、そもそも当時、60トンもの硫酸銅の需要は見込めたのだろうか？ 硫酸銅と消石灰の混合液、ボルドー液(1882年にボルドー大学教授が、この混合物のブドウの葉にたいする殺菌作用を発見したことに因む名称)は、現在もブドウなどの殺菌剤として使われている。グイードは、硫酸銅の農薬としての用途を想定していたのだろうか。

「あのいまましい硫酸銅が、ぼくの不幸の始まりだった！ あの損失をとりもどさねばとどうしても思ってしまう！」(下巻、p. 134)。この言葉どおりグイードは、今度は株の売買によって、硫酸銅の取引による損失を補填しようとする。とりわけ彼は、リオ・ティントという銘柄に関心をもつ。リオ・ティント(Rio Tinto)は、今も現存する金属・鉱業分野の多国籍企業であり、社名は、イギリスの企業が1873年に買収したスペインの鉱山の名に由来する(同、p. 239)。スペイン南部を流れるティント川(リオ・ティントはスペイン語で赤い川の意)流域の鉱脈は、フェニキア人によってすでに知られていたという。グイードは、イギリスからの硫酸銅の輸入によって失った資産を、イギリスの鉱業

会社の株取引によって取りもどすつもりだったのか。

グイードの死後すぐにゼーノは、「哀れな友人の名誉の回復」にとりかかる。それは、何よりもアーダとその子供たちのためであった。しかしグイードの被った「あのような大損をとりもどすのに悠長な商売では間に合わず、株に頼らざるをえない」。そこで、グイードの名義で、彼が投資をしていたリオ・ティント株を大量に購入する。「あたかも、それによってグイードを生き返らせることができるかのように」。こうして、50時間に及ぶ、ゼーノの必死の株投機によって、グイードの失った資産の半分を取りもどすことに成功したのだった(同、pp. 290-292)。

しかし、英雄的ともいえるこの作業に没頭したために、ゼーノはグイードの葬儀に間に合わず、そのことでアーダからは理不尽な恨み言まで浴びせられるはめになる。「あなたのせいで彼は死んだのよ、死ぬ理由なんかこれっぽっちもなかったのに」と(同、p. 304)。

グイードの経営する小さな商社の取引の背景には、海運業の繁栄に基礎を置く19世紀後半の覇権国家イギリスと、中央ヨーロッパ最良の港湾都市として発展したトリエステを結ぶ、活発な物流が想定される。グローバル経済の波にのまれ(なんと陳腐な表現だが)、商品や株式の相場の変動に翻弄されるグイードとその一家の運命が、皮肉とユーモアのスパイスの利いた筆致で語られる『ゼーノの意識』は、すぐれた心理小説であるとともに、当時としては珍しい経済小説としての側面をあわせもつように思われる。

ズヴェーヴォ自身、勤めていた銀行を1899年に退職して、船底塗料を製造する義父の会社に入ったため、第一次大戦まで本格的な執筆活動からは遠ざかった。工場をヴェネツィアとイギリスに建設して事業を拡大したこの会社で要職を任せられ、ヨーロッパ各地に出張する機会が増えたためである。

ところで、多彩な趣味人にして生活破綻者ともいえるグイードは、どこか憎めない性格のもち主ではないだろうか。そうでなければ、グイードとその家族のために、ゼーノが無償であそこまで奔走す

ることはなかっただろう。

イタリア映画に詳しい押場靖志さんからつい最近教えてもらったことだが、フェリーニの映画『8 1/2』(*Otto e mezzo*, 1963)は、『ゼーノの意識』を想起させるという。映画評論家のトゥッリオ・ケジチによる評伝『フェリーニ 映画と人生』(白水社、2010年)には「グイードの意識/『8 1/2』」と題された章があり、両作の類似点が指摘されているというのだ。以前、訳者の押場さんから贈呈されたこの本の頁を早速めくってみた。フェリーニが『ゼーノの意識』に直接影響を受けたわけではないが、たしかに、マストロヤンニ演じる主人公(名前もグイード・アンセルミ!)は、とくに妻と愛人とのあいだで揺れ動くようすなど、小説のグイードと似ているかもしれないと気づかされた。

さて、『ゼーノの意識』最終章、「精神分析」と題された第8章を読んでみることにしよう。日記形式で書かれたこの章においてまず、S 医師の精神分析に不信感を抱いたゼーノが、それを中断する決意をしたことが語られる。さらに、イゾンツォ川沿いの村に休暇で来ていたゼーノが、第一次世界大戦の勃発によって右往左往するようすなどがつつられている。ジュリア・アルプスを源流としてトリエステ湾に注ぐ大河イゾンツォの流域は、第一次世界大戦でイタリアとオーストリアが争う激戦地となり、トリエステ後背からスロヴェニアにかけて広がるカルソ台地では、過酷な塹壕戦が展開されたのだった。

そして本章の最後、すなわち小説の大団円で、世界の終末が予言される。小説は、破局の感とともに幕を閉じるのである。ここでズヴェーヴォは、現代の生活が根元まで汚染され、「人類は、木々や獣たちの場所を奪い、空気を汚染し、自由な空間を包囲した」と指摘したうえで、自らの身体を進化させ、環境に適合した動物たちと異なり、「眼鏡をかけた人間は反対に身体の外側に装置を發明する」と述べている。このあとに続く小説の最終段落を引用しよう。

おそらく、装置によって生み出される未曾有の大災害によって、私たちは健康に戻るのかもしれない。毒ガスがもはや充分ではなくなった

とき、他と変わらないありふれたひとりの人間が、世界の秘密の一室で、現存する爆薬など兇戯に類するような、比類なき爆薬を發明することになろう。そしてやはり、他となんら変わらない別の人間が、ただし他よりもやや病んでいる人間が、そのような爆薬を盗んで地球の中心までよじ上り、最大の効果を發揮できる場所にそれを据えつけることだろう。誰も耳にすることのない強大な爆発が起こり、星雲のかたちに戻った地球が、寄生虫も病もない天空をさまようことだろう。

ゼーノの物語には、なぜこのような結末が用意されていたのだろうか。モリエールの戯曲『病は氣から』(*Le Malade imaginaire*: 1673年初演)の主人公さながらに、ゼーノは自らが病んでいると思ひこみ、さまざまな治療を試みる。S 医師の精神分析もそのひとつであった。自分が病人だというゼーノの意識は、地球が病んでいるという確信と地中深くでつながっているのかもしれない。

第一次世界大戦と環境汚染との関係、またはその直後に流行したスペイン風邪への言及は小説には見られないが、1919年春から書き始められたこの小説の結末は、それらの事実をどの程度踏まえたものなのか。現在の私たちには、この新たなパンデミックの到来を100年前に予言したようにも読める。

(上智大学准教授)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>